

令和二年度 入学試験問題

国語（文系）

一五〇点満点

※配点は、一般入試学生募集要項に記載のとおり。▽

（注意）

- 一、問題冊子および解答冊子は監督者の指示があるまで開かないこと。
- 二、問題冊子は表紙のほかに10ページ、解答冊子は表紙のほかに16ページある（うち10ページは下書き用）。
- 三、問題は全部で3題ある（1ページから10ページ）。
- 四、試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に学部名・受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。
- 五、解答はすべて解答冊子の指定された箇所記入すること。
- 六、解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
- 七、解答冊子は、どのページも切り離してはならない。
- 八、問題冊子は持ち帰ってもよいが、解答冊子は持ち帰ってはならない。

次の文を読んで、後の問に答えよ。(五〇点)

例えば戦争に関してだけけれど、体験をそれがあつたままに語り得る人はまれだ。意識して潤色しなくても、自然に武勇談になつてしまうことが多い。武勇談につきもののフィクションはいく種類があるだろうが、その一例は、自分は臆病ではなかった、むしろ勇敢だったと証明するためのものだ。或ることを証明するためにフィクションが必要というのは逆説めくけれども、そういう場合が多い。自分に都合のいい事実だけを語り、都合が悪いことは黙っているというのも一種のフィクションであらう。

このことは戦争に限らず、すべての体験談にあてはまる。つまり言葉で事実を美化する。だから、言葉とは便利なもの、といわれるわけだ。しかし、よく考えれば逆で、言葉とは不便なもの、といわなければならぬ。なぜなら、言葉は体験の真実を隠してしまうからだ。霧みたいなもので、本人に対してさえ、真実のありかを判らなくしてしまう。なぜ言葉はこのように否定的に働くのだろう。それは、語る人が他人の納得を得ようとして、話の客観化に心を砕くからだ。つまり、彼の心を占めているのはリアリズムの感覚だ。ところで、彼がリアリズムの衣の下で本当にいわんとしていることは、自分は勇敢だったということだとすれば、多くの場合、それは真実に反する。

非真実をいかに本当らしく語るか、ということが彼の本能的な性向だ。したがって、真実を知ろうとする人は、言葉の分厚い層の奥を見きわめようとする。その人の意は言葉を次々と剥ぎ取つて行くことに注がれる。或いは、言葉の霧を透明化することに注がれる。つまり、これを高度のリアリズム精神といえよう。

井原西鶴の作品について、いわゆるキー・ワードに当たる言葉は何であろうか、と考えたことがある。それは読む人によつてさまざまだろうが、私には、(真実よりつらきことはなし)という一句であるように思える。冒頭の例でいうなら、自分は勇敢だと証明しようとする人に、君は実は勇敢ではない、と気付かせることだ。西鶴らしい直言だ。勇敢だと思つ、思わせようと努める心の奥に、臆病なのではないかと危惧を抱いている。臆病であることは隠さなければならぬ。それと今一つ、それ

にこだわっている自分も見抜かれたくない。

しかし、たとえ見抜かれてしまったとしても、彼にも反論の根拠はある。自分を見透かした人間にとつても、その人自身の「真実はこの上なくつらい。その人間も自分の弱点のつらさを知っているからこそ、相手の弱点を識別できる」と反論し得る。この間の事情をユーモアをもって語つたのはツルゲーネフだ。彼はいう。⁽²⁾ 他人を有効に罵りたければ、自分の欠点を相手のこととして並べ立てればいい。つまり、人間にはこうした共有の過敏な粘膜がある。

ここまで、私は体験談について書いて来た。それは好ましく写真に撮られたいという望みに似ている。自分の好ましい姿を、写真の「真」によつて保証されたいのだ。しかし願望が混つて以上、結果は全てが真とはいえない。この場合願望とは、人間に共有な過敏な粘膜を、それぞれに包み隠したい意思といえよう。ここで小説について触れると、こうした人間の弱点が、いわゆるリアリズム小説の第一の着眼点なのだ。筆がこの部分に相わたらなければ、小説の迫力は湧かない。

つまり「あはく」ということなのだが、それでは、人間はなぜ自分たちの弱点について書き、また、それを読むのだろうか。その積極的意義は見当たらない。人間研究をしたいからだ、といつても充分な答えにはならない。きれいごとの答えではあるが、本当ではない。せいぜい、小説を書いたり読んだりするのが面白いからだ、としかいえない。さまざまな性質の違いはあるにせよ、小説とは興味本位のものなのだ。

更に、⁽³⁾ 人間が人間に対して抱くこの種の興味が、いかに矛盾しているかを衝いた人がある。それはアウグスチヌスで、彼がいうには、劇を見る人は他者をあわれむことを欲しているが、自分があわれめられることは欲しない。アウグスチヌスがいたいのは、人間は本来あわれみであるのに、その事実を自認しようとはしないで、劇を見たりして、他人の運命をあわれむことを望んでいるということだ。ここに彼の実存主義があり、まことに鋭敏な洞察だ。劇が多くの人々の心をとらえることはだれも知っているが、それは酔うためであつて、あわれな自己を直視するのを避けるためだという。或いは、劇が存在するのは、観客の自己認識の甘さによりかかっているというわけだ。アウグスチヌスのこの冷徹な見方には、反論の余地はない。彼がこうした認識に到る前、劇や物語に耽溺^{たんでま}し、いうまでもなく一流の鑑賞者だったことを思うと、なお更だ。

トルストイの思想が、これにはなほだ似ていることは、知る人も多いだろう。彼はあの大部の傑作を成した後に、また新しい世界に踏み込んで行つた。そして、考へて行くにつれ、自分の小説を含め、往時読まれていた大部分の小説を否定せざるを得なくなつた。この思想と彼が築き上げた近代小説とは、互いに矛盾したままで併存し、現代に残つてしまつたわけで、例へていうなら、小説という山脈の中心は空洞で、暗闇に寒々と風が吹き抜けている観がある。その後の小説家たちは、この事態を放置したままで、小説を書き続けているのだ。勿論私も、こうした人々の中の一個のチンピラに過ぎないわけだけれど、以上のアウグスチヌスとトルストイの思想は心に懸つていて、時々灰色の雲のように心を去来している。

だれも子供の頃には、見聞きするものすべてが量り知れない意味を孕んでるように思つてゐる。その一つとして、人間の世界に好奇心をさせ、大人たちの話に耳を澄ます。その秘密をとくほぐし、実態を知らせてくれるものは、彼らの体験談だと思ふわけだ。しかし、体験談は眞実をあきらかに示すというよりも、しばしば眞実を覆つてしまうものだということを、彼は知る。その結果、体験談の語り直しが行われた。それが小説であつたといえよう。つまり、体験談からは現れてこない人間の眞実に気付いて、これをあらわにする方法を考へた。それがリアリズムの小説であり、かつては、眞実は小説でなければ語り得ないという信念さえあつた。

成果はあつたといえよう。リアリズム小説は、人生の分厚い雑多な層を透視するレントゲン光線のような役割を果たした。しかし、その結果もたらされたのは、^{*}「人生はひとつの崩壊の過程に過ぎない」という結論めいたことだつた。トルストイが反省し、苦しんだことは、リアリズムがもたらしたこのような決定論であつた。この開拓者にはリアリズムの行き着いた場所があきたらなかつた。更にその先に、果て知れない地域が^{ひろ}拡がっていたわけだ。

人の世はそれ自体が^た喩え話のようなもので、意味を隠し持つてゐる。これは大勢の人間の思い込みであつて、それをあきらかにしたいという意味は捨てきれない。この場合、人生の外貌を形づくつてゐる大きな要素は、人の口から出る言葉・言葉だ。体験談もまた、永遠に雑草のように^{はびこ}つて、地球を覆つてゐる。

リアリズムの小説は、それへの優れた考察であり、解釈であつたが、この生の言葉の原野に較べれば、庭園のようなもので

あつたことはいうまでもない。⁽⁵⁾これからも、或る種の人々は言葉・言葉にいとみ続けるであろうが、その場合、鍵になるのは、体験談と告白という二つの観念の識別、把握の仕方であるように、私には思える。

(小川国夫「体験と告白」)

注(*)

ツルゲーネフ||ロシアの小説家。

アウグスチヌス||四、五世紀のキリスト教会の神学者。

〈人生はひとつの崩壊の過程に過ぎない||アメリカの小説家フィッツジェラルドのことば。いくら努力しようとも人生は

不幸へ向かう無意味な過程に過ぎないという見方を表す。

決定論||すべてのできごとはあらかじめ決またとおりに生起するという考え。

問一 傍線部(1)はどのようなことか、説明せよ。

問二 傍線部(2)はどのようなことか、説明せよ。

問三 傍線部(3)はどのようなことか、文中のアウグスチヌスの議論を参考に説明せよ。

問四 傍線部(4)について、このような信念が失われたのはなぜか、説明せよ。

問五 傍線部(5)のように筆者が言うのはなぜか、説明せよ。

次の文は、太宰治に傾倒していた作家、小山清による井伏鱒二訪問記の一節である。井伏は太宰の師匠であった。これを讀んで、後の問に答えよ。(五〇点)

私が初めて井伏さんに会つたのは、終戦の年の春、太宰さんが甲府の奥さんの里に疎開したときのことであつた。その年の三月上旬に私は罹災^{りさい}して三鷹^{みたか}の太宰さんの許^{もと}に同居してゐたが、四月上旬に三鷹^{みたか}界隈^{かいわい}に敵機^{かき}の来襲^{らいしゅう}があり、太宰さんの家も半壊^{はんくわい}の憂目^{うれめ}に遭つたので、太宰さんは先に奥さんや子供さんを疎開^{そかい}さしてあつた甲府へ行くことになり、私は独り三鷹に残ることになつたのだが、その際私は太宰さんを送つてゆき、一週間ばかり甲府で遊んできた。その頃、井伏さんは甲府市外の甲運村に疎開してゐた。ある日、甲府の井伏さんの行きつけの梅ヶ枝といふ旅館で、三人で酒を飲んだ。そのとき、井伏さんは太宰さんに向つてふと、「君は運がよかつたね」と云ひ、その言葉に太宰さんが一寸表情^{ちよつと}をみると、井伏さんはすかさず、「僕もよかつたがね」と云つた。私は自分が傾倒してゐる人に対して、こんな口をきける人がゐようとは思つてゐなかつた。井伏さんと別れて帰る道すがら、太宰さんは私に向ひ、「井伏さんつて興奮させるところのある人だろ」と云つた。

終戦後私は北海道へ行つたが、太宰さんが逝^なくなつた年の秋に、また東京に歸つてきた。その後、私はときどき清水町の井伏さんのお宅に伺ふやうになつた。そして井伏さんに親炙^{しんしや}するにつれ、太宰さんが身につけてゐた雰囲気^{ふんいき}の幾分かは、井伏さんから伝はつたものであることを感じた。また、「井伏鱒二選集」の後記で、太宰さんが云つてゐる、「さまざま山ほど教へてもらひ」といふことが、よく合点がいつた。⁽¹⁾井伏さんと対坐^{たいざ}してゐるときほど、逝^なくなつた太宰さんの身近にゐる気のされることは、私にはないのである。

井伏さんのお宅に伺ふと、いつも玄関からは入らずに、庭先へ廻り、縁側から書齋^{しよさう}に上る。井伏さんの書齋は庭に面した八畳間で、ここで井伏さんは客に会ふ。

井伏さんは庭のことを植木溜^{うゑきたため}と云つてゐる。実際、処狭きまでに、庭いっぱいにいろんな樹木が植ゑてある。井伏さんはその樹の一つ一つを、井伏さんの郷里、深安郡加茂村の家の背戸から眺めた、故郷の山々の姿になぞらへて見てゐるのだとい

ふ。あの樹はなに山、この樹はなに山といふやうに。

私は書齋に上り、井伏さんと二言三言話すと、ホツとして気持が寛いでくる。井伏さんの話ぶりは静かで、⁽²⁾こちらの気持が吸ひ込まれてゆくやうな感じがする。たしか青柳瑞穂氏が書いた井伏さんの印象記であつたと思ふが、道で井伏さんに逢つたやうな場合、井伏さんはひとところに立ち止つてゐて、自分だけが歩いて近づいてゆくやうな感じがすると云つてあつたのを覚えてゐるが、井伏さんと向ひあつて話をきいてゐるときの気持がさうである。井伏さんの話には目だたない吸引力があつて、いつか自然に井伏さんの身についた雰囲気はこちらが同化されてゆくのである。井伏さんが頭で話す人でなく、気持で話す人だからであらう。そして井伏さんの話は、きいてゐると、釣りのことにしろ、植木のことにとしろ、または人の噂にとしろ、そのまま滋味ゆたかな随筆や小品になる感じがする。

こんど私はこの訪問記を書くために、井伏さんをたづね、いろいろ意見を伺つたのだが、格別改まつた気持では質問をしなかつた。いつもと同じやうに楽な気持で、記事をつくることなどは忘れて、話をきくことが出来た。私はその日の話ばかりではなく、平素私が井伏さんについて感じてゐることを順序不同に書いて、責を塞ぎたいと思ふ。話をきいてゐるときは楽しかつたが、さてかうして筆を執つてみたら、なんだか難しい気がしてきた。⁽³⁾井伏さんといふ芳醇な酒を、私といふ水で、いたづらに味ないものにしてしまふのではないかと思ふ。

井伏さんは五十も半ば越して、いまが男盛りである。鬢^{びん}にも大分白いものが見える。太宰さんが同じく選集の後記で云つてゐる、「洪くてこはくて、にこりともしない風貌」である。「叔父^{*}ワーニヤ」の中に「昔とはお綺麗さが違ひます」といふ台詞があるが、私は井伏さんの若い頃のことは知らないが、なんだかそんな感じがする。井伏さんの風貌には一寸男惚^ほれをさせるものがある。恰幅^{かつぶく}も立派で、てこでも動かない感じである。私などはもう少し太つて、見かけだけでも立派に見えるやうになりたいのだが、井伏さんは自分の「立派さ」を持ってあましてゐるやうである。「太つてゐると、小説が下手に見えていけない」と云ふ。「芥川龍之介が人氣があるのは痩せてゐたからだ」と云ふ。⁽⁴⁾殊更に自分を人に野暮つたく印象づけようとしてゐるのかも知れない。それほど井伏さんは、いはばスマートなのである。雨河内川^{あめがふちがは}かに釣りに行つたときの写真があるが、岩の上にあつて

釣竿をあつかつてゐる井伏さんの姿は、軽快で、若いなあといふ気がする。そしてその衰へぬ若さは、常に井伏さんの作品の艶になつてゐる。

清水町のいまの住居は、昭和二年に建てたもので、間取りなども井伏さんの設計になるものだといふ。もう三十年近くにもなるわけである。根太がすつかり緩んでゐるので、風や地震には油断が出来ないさうである。いつぞや台風が吹くといふ前ぶれがあつた日に伺つたが、井伏さんは実に不安な面持をしてゐて、家の裏側に材木で突かひ棒をしてゐると云つた。またある日、お邪魔してゐる間に微震があつたが、井伏さんは立ち上つてそはそはした。住居についての意見をきいたら、なによりも耐風耐震といふことが懸念されるやうな塩梅であつた。住居にあまり凝る気持はないのであらう。井伏さんの日常も、凡そ簡素を旨としてゐるやうに見受けられる。

井伏さんの机は、横長の抽斗のない、材は赤松の、もう五十年來愛用してゐるものである。夜になると、井伏さんはこの机のうへに電灯を引つぱつてきて、執筆するやうである。文房具なども、とりわけて好みに執することもないやうである。井伏さんは身のまはりをかへりみて、あれも貰ひもの、これも貰ひもの、それも、と云つた。井伏さんはいまいい硯箱が欲しいさうである。

部屋の壁には、ゴッホの糸杉の絵の複製が貼つてある。カレンダー附のポスターである。どこやらの酒場に掲げてあつたのを、気に入つたので、無心してきたのだといふ。

井伏さんは机のわきにある小抽斗をあけて、なにやら取り出し、私に渡して寄こした。見ると、馬糞紙でこしらへたメンコであつた。井伏さんが子供の頃に弄んだ品ださうである。こなひだ郷里へ歸つたときに、生家で見つけたのだといふ。

「心が荒れてゐるときなど、こんなものを取り出して見てゐると、柔らいでくるね」と井伏さんは云つた。

丸メンで、表には武者絵が描いてある。私が子供の時分に流行つたものよりも、もう一つ時代がついてゐる。見てると、私の胸の中にも、泉のやうに湧き出てくるものがあつた。

(小山清「井伏鱒二の生活と意見」より)

注(*)

青柳瑞穂 II 仏文学者。

「叔父ワーニャ」 II ロシアの作家チエーホフの戯曲。

根太 II 床板を支える横木。

馬糞紙 II 質の悪い厚紙。ボール紙。

メンコ II 表面に絵や写真のあるボール紙製の玩具。文中にある「丸メン」は円形のメンコ。

問一 傍線部(1)のように感じられるのはなぜか、説明せよ。

問二 傍線部(2)のように感じられるのはなぜか、説明せよ。

問三 傍線部(3)はどういうことか、説明せよ。

問四 傍線部(4)はどういうことか、説明せよ。

問五 傍線部(5)はどういうことか、説明せよ。

三

次の文は、『和泉式部日記』の一節である。恋人を亡くして嘆きの日々を送っている「女」のもとに、「宮」から恋文が贈られるようになった。これを読んで、後の問に答えよ。(五〇点)

かくて、しばしばのたまはする、御返りも時々聞こえさす。つれづれも少しなぐさむ心地して過ぐす。

また御文あり。ことばなど少しこまやかにて、

(1) 「語らばなぐさむこともありやせむ言ふかひなくは思はざらなむ

あはれなる御物語聞こえさせに、暮れにはいかか」とのたまはせられたれば、

「なぐさむと聞けば語らまほしけれど身の憂きことぞ言ふかひもなき

(2) 生ひたる蘆にて、かひなくや」と聞こえつ。

思ひかけぬほどに忍びてとおぼして、昼より御心設けして、日頃も御文とりつぎて参らする右近の尉じやくなる人を召して、「忍びてものへ行かむ」とのたまはすれば、さなめりと思ひてさぶらふ。

あやしき御車にておはしまして、「かくなむ」と言はせたまへれば、女いと便なき心地すれど、「なし」と聞こえさすべきにもあらず、昼も御返り聞こえさせつれば、ありながら帰したてまつらむも情けなかるべし、ものばかり聞こえむと思ひて、西の

妻戸むらとに藁座わらざさし出でて入れたてまつるに、世(3)の人の言へばにやあらむ、なべての御さまにはあらずなまめかし。これも心づかひせられて、ものなど聞こゆるほどに月さし出でぬ。「いと明し。⁽⁴⁾古めかしう奥まりたる身なれば、かかるところに居ならはぬを、いとはしたなき心地するに、そのおはするところに据ゑたまへ。よも、先々見たまふらむ人のやうにはあらじ」とのたまへば、「あやし。今宵のみこそ聞こえさすと思ひはべれ。先々はいつかは」など、はかなきことに聞こえなすほどに、夜もやうやうふけぬ。

注(*)

藁座Ⅱ藁で編んだ敷物。

問一 傍線部(1)の和歌を現代語訳せよ。

問二 傍線部(2)の「生ひたる蘆」は、次の和歌の一部を引用したものである。

何事も言はれざりけり身の憂きは生ひたる蘆のねのみ泣かれて〔古今和歌六帖〕

これを踏まえて、傍線部(2)は女のどのような気持ちを伝えようとしたものか、説明せよ。

問三 宮の来訪を聞いてから宮を西の妻戸のもとに招き入れるまでの、女の心の動きを説明せよ。

問四 傍線部(3)(4)を、適宜ことばを補いつつ、それぞれ現代語訳せよ。

問題は、このページで終わりである。